明治学院大学
心理学部
付属研究所
通信

2020 March 第12号

ごあいさつ

教育と研究は大学の重要な使命であることから、本学では2つの大学附置研究所ならびに8つの学部付属研究所を有し、学生への教育のみならず、各分野における研究にも力を入れております。

心理学部付属研究所は、最初は、学長直属の機関である心理臨床センターとしてスタート致しました。これは、大学院心理学専攻に臨床心理士養成のための指定大学院を設置するため、学外の方々を対象とした心理相談施設が必要とされたためです。その後、2004年に心理学部が独立すると共に、心理臨床センターも学部付属の研究所として新たなスタートを切ることとなりました。

当研究所は、相談・研究部門(心理臨床センター)と調査・研究部門の2つの部門から構成されております。調査・研究部門では、心理学に関する諸領域の調査・研究を行っており、相談・研究部門は、学部生・大学院生のための実習機関としてだけではなく、地域の皆様のための相談機関としての役割も担っております。加えて当研究所では、例年、専門分野に関する公開セミナーも開催しております。

今後も、心理学を基盤として社会に対する貢献を積み重ねていくことができるよう、所員全員邁進したいと思います。

心理学部付属研究所長　金沢 吉展

調査
研究部門報告

2019年度も所員による様々な研究活動が行われました。3件の特別プロジェクトでは、「障がい者の余暇活動など」「国内で進む国際化の問題」「高齢者問題」という現代社会の課題について研究・実践を進めました。これから本格的な研究に発展する可能性を内包した4件の萌芽研究では「心理療法の効果に関する研究」「集団認知過程の新たな分析法」「図画工作科における探索型学習」「STEAM教育」という注目される研究を支援してきました。これからも心理学部と連携し地域に貢献する研究を推進していきます。

調査・研究部門主任　宮﨑 眞

特別研究プロジェクト報告

障害児者心理学
緒方 明子(教育発達学科教授)
小林 潤一郎(教育発達学科教授)、宮﨑 眞(教育発達学科教授)、
＜学習支援＞岡田 怜奈、佐伯 野萌子、飯田 早稀、柴田 和純
＜余暇活動グループ＞石川 恵莉、川並 裕香、厚地 友子
＜フレンドシッププログラム＞川渕 竜也(研究員)、新沼 優理、飯田 早稀

学習支援・仲間作り支援・余暇支援…ニーズに合った支援が地域で受けられるようになってほしい、という願いからスタート

本研究所の地域貢献のあり方に関する探索的研究

このプロジェクトの参加者は特別なニーズのある幼児期の子どもから成人の方まで、年齢もニーズも多岐にわたる方々です。読み書きの困難さ、英語学習の困難さ、対人関係や集団活動が難しい等学齢期の子どもたちが自分では解決できない問題をサポートしています。また、学校を卒業して就労している方々で、一人では余暇を過ごすことができない方々の余暇のあり方についても研究しています。完成しているプログラムを実施しているわけではなく、参加者と一緒に試行錯誤を繰り返しながら、各参加者に最も適した支援内容・方法の工夫をしています。

比較・国際教育学
渋谷 恵(教育発達学科教授)
杉山 恵理子(心理学科教授)、緒方 明子(教育発達学科教授)、
鞍馬 裕美(教育発達学科准教授)、阿部 裕(心理学部名誉教授・研究員)、
倉本 英彦(研究員)、榊原 佐和子(研究員)、津田 友理香(研究員)、
田中 ネリ(研究員)、横澤 直文(研究員)

多文化を生きる人が共につながり、支え合う関係をつくる

心理学部におけるグローバル化および内なる国際化に関する探索的研究

今年度は心理学部、心理臨床センターと多文化の子どもたちやユース、支援者をつなぐネットワークづくりと研究に取り組みました。外国にルーツのある子どもたちと保護者の支援(「飯能ラテンプロジェクト」)、多文化ユースの支援(「多文化ユースのためのアートワークショップ」)、多文化環境において心の支援を行う多職種団体のネットワーク構築(「多文化こころの支援ワークショップ」)、多文化に開かれた社会教育施設に関する調査など、研究員のイニシアチブによる様々なプロジェクトを今後も継続して展開していきたいと思います。

認知行動療法
森本 浩志(心理学科准教授)
野村 信威(心理学科准教授)

認知症の人とその家族のこころを支える

認知症の人とそのご家族のためのセルフケアプログラムの効果検討

認知症と診断される人が増えています。認知症が進むと生活の中で不便なことが増えるため、生活の支援(介護)が必要になります。認知症の人の介護は主に家族が行っていますが、認知症という病気に起因する難しさなどから、認知症の人と家族の双方がストレスを抱えこんでしまうことがあります。このプログラムでは、認知症の人が認知症という病気と共に自分らしく生活できるように回想法をベースとしたサポートを、また家族の方が認知症と共に生きる家族と自分の双方を大切にした生活を送れるように認知行動療法をベースとしたサポートを行っています。

萌芽研究プロジェクト報告

臨床心理学
金沢 吉展(心理学科教授)
清水 良三(心理学科教授)、
横澤 直文(研究員)、上野 まどか(研究員)

セラピストとクライエントの良好な関係を探る

作業同盟に影響を与える要因に関する研究

心理療法の効果に影響を与える要因として、海外においては、セラピスト-クライエント間の作業同盟が注目され、多くの研究が行われています。しかし日本ではまだ作業同盟に関する実証的研究は乏しいのが現状です。そこで私たちは、作業同盟に影響を与える要因を探るために必要な、作業同盟の測定尺度を作成することと致しました。現在日本において、作業同盟測定のための尺度は1件が公開されておりますが、海外においては、この尺度の基になった原版尺度の短縮版および短縮改訂版が頻繁に用いられています。私たちは、短縮改訂版の著者から正式な許諾を得て、日本における標準化作業を含め、日本語版の作成を進めております。

認知心理学
金城 光(心理学科教授)
鏑木 秀和(心理学科助手)、長屋 佐和子(研究員)、小河 妙子(研究員)

集団の感情状態を察知する認知のメカニズムを探る

集団の認知過程を明らかにする眼球運動測定・分析方法の検討

2019年ラグビーワールドカップの日本初戦でロシアに勝利した際の観客の写真を見ただけで、我々はその試合の勝敗を峻別できます。このように、人間は多くの顔の表情から瞬時に集団全体の感情状態を推測することができます。この能力はEnsemble perception(集合知覚)といいますが、背景となる認知過程は明らかではありません。そこで、本研究では複数の顔を見る際に集団の顔の平均像を知覚するのかという仮説を検証するため、平均顔を心的表象として形成できるのか、あるいは構成する顔の特徴部分のみの表象を記憶するのかを切り分ける課題を作成しました。実験では、参加者に対して複数の顔を同時呈示し、それらの顔の平均顔をイメージさせ、平均顔とその他の顔の弁別ができるかの課題を行いました。結果、複数の顔を集合知覚する際に平均顔の心的表象を形成している可能性が示されました。今回は眼球運動測定には至らなかったため、今後は顔の集合知覚に眼球運動がどのように関連するか検証を進める予定です。

算数・数学教育学
辻 宏子(教育発達学科教授)
水戸 博道(教育発達学科教授)、手塚 千尋(教育発達学科専任講師) 、
杉山 雅俊(教育発達学科助教)

これからの社会において求められる力を育てる
～初等段階からのSTEAM教育～

幼児期・児童期におけるSTEAM教育に関する研究

近年の技術革新に伴う社会の劇的な変化に対応することができる次世代の育成のために、今後求められる教育はどうあるべきか、いろいろと議論されています。「STEAM教育」の議論はその一つであり、科学(S)、技術(T)、工学(E)、芸術(A)、そして数学(M)、それぞれの教科での学習を実社会での課題解決に生かしていくための教科横断的な教育です。STEAM教育は理数系の人材育成に加え、社会における多様な問題に取り組む際に必要となる、豊かな発想を持った創造的な人材が求められていることから、自由な表現やデザイン思考に関するArtの成果を取り入れようとしていることが特徴とされています。

美術科教育学
手塚 千尋(教育発達学科専任講師)
佐藤 真帆(研究員)、笠原 広一(研究員)、岩永 啓司(研究員)、
吉川 暢子(研究員)

芸術に基づく探究型学習活動の評価とは－主体的・対話的で深い学びの実現に向けて－

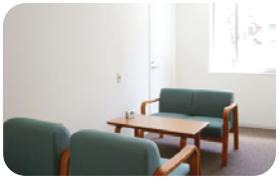
Arts-Based Research による探究活動の評価に関する質的調査研究

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、各教科で探求型学習の拡充が目標とされています。本研究では、「芸術が持つ多様な表現の手段や形式を活用した芸術に基づく探究：Arts-Based Research (ABR)理論」から図画工作科の探究型学習「土の色プロジェクト(第３学年、全4時間)」をデザイン・実践し、1)児童の学びを可視化し深い学びを促すワークシートの作成及びドキュメンテーション展覧会、2)教員へのアンケート調査を実施しました。児童の姿や教員の言葉から、図工ならではの探究の成立過程や評価項目を開発する視点を得ることができました。

相談・研究部門（心理臨床センター）

2019年度も、カウンセラー2人、アシスタントカウンセラー4人、助手、教学補佐、受付、週に1回勤務のカウンセラー1人、専任教員という体制で、相談・研究部門（心理臨床センター）の運営を行ってきました。面接においては大学院生、スーパーバイザーが中心となり、本年度も多くの面接が行われました。新規の申し込みも順調に増え、新規ケースの受理は2020年1月の時点で一時的にお待ちいただいています。今後も引き続き、地域のニーズを把握し、利用者の皆さまに貢献できるよう、努力する所存です。

相談・研究部門主任　伊藤 拓



2019年度※新規受付ケース相談分類

	件数
学校・園生活	4
発達面	13
友人関係	2
家族問題	5
暴力・暴言	—
自己理解	11
職場問題	—
精神疾患	1
その他	6
不明	—
合　計	42

2019年度※心理臨床センター利用者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
初回面接	9	7	11	5	8	3	13	1	4	3	—	61
継続面接	137	137	155	163	125	154	150	145	125	131	95	1291
心理検査	—	3	—	1	2	1	2	3	3	6	2	15
合　計	146	147	166	169	135	158	165	149	132	140	97	1367

※2020年2月18日現在

公開セミナー報告

心理臨床動作学
清水 良三（心理学科教授）

2019年度公開セミナーでは、臨床動作法に基づく心とからだのつながりについてのわかりやすい講義のあと、こころとからだの体験ワークを参加者全員で行いました。普段の生活で意識しないうちに余分に力んでしまっている自分のからだの緊張に気づいたり、お互いの指と指を合わせて動かすという動作コミュニケーションの練習をするうちに、はじめは緊張していた初対面の参加者の皆さんがみな素敵な笑顔になり、次はいつ開催されるかという問い合わせが終了後すぐにたくさん寄せられたほどの、まさにこころとからだが一体になって元気になっていくことを体験していただけたセミナーとなりました。

【公開セミナー】2020年1月11日（土）開催

こころが動く！ からだからのアプローチ

こころとからだを元気にする方法

- こころとからだのつながり（講義）
- ゆるめることの不思議・ET等（体験ワーク）

講 師
倉田 知子
（臨床心理士・臨床動作士・臨床発達心理士・公認心理師）
佐藤 葵
（臨床心理士・臨床動作士・公認心理師）

司会進行
清水 良三（心理学科教授）

明治学院大学心理臨床センター

あなたのこころを支えたい

学校、対人関係、性格、
子育ての悩み…お気軽にご相談ください。

予約電話　03-5421-5444
受付時間　火～土曜日 午前10時～午後5時30分
ホームページ　http://psy.meijigakuin.ac.jp/clinic/
※ホームページからご相談の予約はできません。お電話のみの受付となります。